

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院朝庭の調査(飛鳥藤原第169次)

2011年4月から11月中旬にかけて藤原宮朝堂院朝庭の発掘調査を実施しました。本年の調査区は朝庭の中央北寄り(大極殿院南門の南約70m)に位置しています。朝庭の空間利用のあり方を検討するとともに、下層に存在する藤原宮造営期の遺構を具体的に把握することを目的に調査をおこないました。

これまでの調査で、朝庭は径5～10cmの礫を敷き詰めて整備されたことがわかっています。今回の調査区内でも同様に礫敷を検出しましたが、全体的に礫の遺存状況は良くありませんでした。礫敷上では、礫敷と一体的に設けられた南北方向の石詰暗渠を検出しましたが、その他に遺構は確認されませんでした。この点は、今回の調査区の範囲がまさに広場の中央部分であったことを示すものといえます。

これに対して下層調査では、藤原宮の造営に先行して設置された朱雀大路やそれにそって並ぶ柱穴列、造営時の資材運搬に用いられた運河、掘立柱建物などを検出しました。先行朱雀大路や運河は、以前の調査で確認されていたものの延長部分にあたります。これまでに検出された運河の総延長は570m以上となりました。また、掘立柱建物は今回の調査区内で6棟を確認し、少なくとも3時期にわたって建て替えがなされたことがあきらかになりました。藤原宮中枢部にあたる朝庭の下層で多くの遺構を確認したことにより、藤原宮の造営過程をこれまで以上に詳しく復元していく手がかりが得られました。

なお、11月5日に開催した現地説明会には、降雨にもかかわらず、620人もの参加者がありました。藤原宮の調査に多くの方々に関心を寄せていることを改めて実感しました。(都城発掘調査部 廣瀬 覚)



調査区全景(東から)